

---

略 年 表

---



菊池 清明  
(きくち きよあき)

1952年12月11日生まれ

**【学歴】**

1972年4月 関西外国語大学外国語学部英米語学科入学  
1976年3月 関西外国語大学外国語学部英米語学科卒業  
1976年4月 関西外国語大学大学院外国語学研究科  
英語学専攻博士課程前期入学  
1982年3月 関西外国語大学大学院外国語学研究科  
英語学専攻博士課程後期単位取得退学

**【学位】**

2013年3月 大阪大学大学院言語文化研究科論文博士（言語文化）

**【職歴】**

- 1982年4月 愛媛大学教養部専任講師  
 1986年4月 愛媛大学教養部助教授  
 1991年4月 東京都立大学人文学部助教授  
 2005年4月 東京都立大学・首都大学東京教授  
 2006年4月 立教大学文学部英米専修教授

**【兼任講師】**

- 1992年4月～2002年3月 中央大学 文学部  
 1993年4月～1996年3月 白百合大学 文学部  
 1996年4月～2006年3月 立教大学 文学部（大学院文学研究科）  
 1999年4月～2001年3月 早稲田大学 文学部（大学院文学研究科：学位論文審査員）  
 2006年8月 東京都立大学・首都大学東京（集中講義）  
 2007年8月 東京都立大学・首都大学東京（集中講義）  
 2011年11月 関西外国語大学大学院・英語教育特別研究講義

**【賞罰】**

- 1981年 日本英文学会第4回 新人賞佳作

**【在外研究歴】**

- 2003年10月～2004年7月  
 オックスフォード大学英文科招聘研究員（Associate member of the English Faculty, Oxford University）並びにオックスフォード大学, ユニバーシティ・コレッジ上級客員研究員（Visiting fellow and temporal member of Senior Common Room of University College, Oxford University）  
 2012年4月～2012年10月  
 オックスフォード大学, キャンピオンホール客員研究員（Visiting guest of Champion Hall, Oxford University）  
 2012年10月～2013年3月  
 ハワイ大学東アジア言語・文学科客員研究員（Visiting scholar of Department of East Asian Languages and Literatures, University of Hawaii at Manoa）

2016年7月～2016年8月

立教大学派遣研究員（ハワイ大学東アジア言語・文学科）

### 【学会ならびに社会における活動等】

1979年5月より日本英文学会会員

（1994年4月より1998年5月まで大会準備委員会委員）

（2008年4月より2012年3月まで評議員）

1984年12月より日本中世英語英文学会会員

（2000年4月より評議委員）

（2001年4月より2003年3月まで編集委員）

1996年12月より2003年4月まで日本中世英語英文学会東支部幹事

（2001年4月より2003年4月まで代表幹事）

1995年12月より国際アーサー王学会日本支部会員

2006年4月より2007年3月 日本中世英語英文学会研究助成委員会委員

（2007年4月より2008年3月まで委員長）

2008年4月より日本英文学会関東支部

（2008年4月より2010年まで編集委員）

1982年4月より（財団法人）日本英語検定協会面接委員

1982年4月より1991年3月まで（社団法人）国際体験者協会委員

1990年4月より1991年3月までNHK文化センター上級英会話講師

2003年4月より2004年3月まで東京都教職員研修センター大学講座講師

### 【学内役職】

文学部文学科科長，文学部人事委員長，文学部入試委員長

学部運営会議座長，英米専修主任，文学研究科英米文学専攻主任

全学カリキュラム一般教育人事委員長

### 【研究業績】

#### I. 著書

1. *Studies in Medieval English Language and Literature I*

『中世英語英文学 I—その言語・文化の特質—』春風社，2015年。

2. *Studies in Medieval English Language and Literature II*

*The Sound of Literature: Aspects of Language and Style in The Owl and the Nightingale*. Shunpusha, 2016.

3. *Studies in Medieval English Language and Literature III*

『中世英語英文学 III —中世イギリスロマンス「ガウエイン卿と緑の騎士」』春風社, 2017年.

II. 編著書

4. 『英語史：現代英語の特質を求めて—多文化性と国際性』関西人文科学出版会, 2009年.
5. 『英語学：現代英語をより深く知るために—世界共通語の諸相と未来』春風社, 2016年.

III. 共編著書

6. 『Sententiae』北斗書房, 1995年.

IV. 論文

7. 「*Sir Gawain and the Green Knight* における二人称代名詞 YE と THOU の交替移行について」(『英文学研究』(日本英文学会編) 第 58 卷 2 号, 1981 年, 233~46 頁 (日本英文学会第 4 回新人賞佳作論文).
8. 「A Glossary to Old English Texts in *The English Language: A Historical Reader*」*The Helicon* (愛媛大学英文学会編) 第 36 号, 1984 年, 41~56 頁.
9. 「*Repetition in The Owl and the Nightingale*」『英文学研究』(日本英文学会編) English Number 1986, 17~38 頁.
10. 「中世文学あるいはその無意味性—*Sir Gawain and the Green Knight* の場合」, *The Tabard*, Vol. II. 1987 年, 20~25 頁.
11. 「*Tautology and the Style of The Owl and the Nightingale*」『愛媛大学教養部紀要』第 XX 号, 1987 年, 431~47 頁.
12. 「*Sir Gawain and the Green Knight* における登場人物の文体的個性について」『日本中世英語英文学研究』(日本中世英語英文学会編) 第 3 卷, 1988 年, 57~84 頁.
13. “Some Notes on Contracted Form, Ellipsis, and Vocabulary in *The Owl and the Nightingale*, Essays in Honour of Professor Haruo Kozu: On the Occasions of His Retirement from KUFU” (*The Intercultural Research*

- Institute), 1990, pp.21-43.
14. "Aspects of Repetitive Word Pairs," *POETICA* 42 (Shubun International Co., Ltd.), 1995, pp. 1-17.
  15. "Another Bird Debate Tradition?" *Medieval Heritage Essays in Honour of Tadahiro Ikegami* (Yushoudo), 1997, pp.197-210.
  16. 「中世文学（上）— その時代と詩人の諸相」『英語青年』（研究社），第144巻／第6号，1998年，1~5頁。
  17. 「中世文学（中）— その時代と詩人の諸相」『英語青年』（研究社），第144巻／第7号，1998年，37~40頁。
  18. 「中世文学（下）— その時代と詩人の諸相」『英語青年』（研究社），第144巻／第8号，1998年，24~28頁。
  19. 「中世英語・英文学，あるいはその現代性」『英語青年』（研究社），第147巻／第6号，2001年，56~59頁。
  20. 「中世イギリス文化と「個」の意識—小説の起源を求めて」『英語文化フォーラム—異文化を読む』音羽書房鶴見書店，2002年，9~23頁。
  21. 「英語史的／文体論的英詩鑑賞のすすめ」『英語青年』（研究社），第149巻／第4号，2003年，222~24頁。
  22. 「言語あるいは文学研究のゆらぎとひろがり— John Hines, Voices in the Past: English Literature and Archaeology」『英語青年』（研究社），第153巻／第2号，2007年，30~32頁。
  23. 「中世文学の遺産とその評価— OED からマニユスクリプト・コンテキストあるいは学際性へ」Neil Cartlidge, ed., *The Owl and the Nightingale: Text and Translation* 『英語青年』（研究社），第153巻／第8号，2007年，33~35頁。
  24. What the Style of *The Owl and the Nightingale* Tells Us: Colloquialism, Language of Law and Dynamics of Aural Literature 『テキストの言語と読み』2007年，186~94頁。
  25. 「*The Owl and the Nightingale* への個別文体論的アプローチ」『言語・文化研究の諸相』大阪教育図書，2008年，27~51頁。
  26. 「中英語テキストの多様性／多義性と辞書」『ことばの響き—英語フィロロジーと言語学』開文社，2008年，35-50頁。
  27. 「中世文学とテキスト校訂—『梟とナイチンゲール』二つのテキスト校訂—」『英語フィロロジーとコーパス研究』松柏社，2009年，357~70頁。

28. 『『ガウエイン卿と緑の騎士』における acole and kyse について – clip and kysse とその異形』『『バーオウルフ』とその周辺』春風社, 2009年, 528-34頁.

V. 書評

29. 真鍋和端著 *The Syntactic and Stylistic Development of the Infinitive in Middle English* (九州大学出版会): 『英語青年』(研究社), 第136巻 / 第4号, 1990年, 208-09頁.
30. 鈴木榮一著 『サー・ガウエイン頌』(開文社): 『英文学研究』(日本英文学会編)第68巻 / 第2号, 1991年, 387-92頁.
31. Thorlac Turville-Petre, *England the Nation: Language, Literature, and National Identity 1290-1340* (Clarendon Press, 1996): 『英文学研究』(日本英文学会編)第7巻 / 第2号, 1998年, 181-84頁.
32. 小野茂著 『フィロロジの愉しみ』(南雲堂): 『英語青年』(研究社), 第144巻 / 第5号, 1998年, 298-300頁.
33. Takami Matsuda, *Death and Purgatory in Middle English Didactic Poetry* (D.S. Brewer, 1997): 『日本中世英語英文学研究』(日本中世英語英文学会編)第14巻(英文), 1999年, 121-32頁.
34. 小野茂著 『フィロロジスト – 言葉・歴史・テキスト』(南雲堂) 小野茂著 『小野茂訳詩集 – ワーズワース / シェリー / キーツ』(南雲堂): 『英語青年』(研究社) 146巻 / 第12号, 2001年, 805-06頁.
35. Neil Cartlidge(ed.), *The Owl and the Nightingale* (University of Exeter Press, 2001): 『英文学研究』(日本英文学会編)第80巻 / 第1号, 2003年, 76-82頁.
36. Yoshiyuki Nakao, *The Structure of Chaucer's Ambiguity* (Peter Lang, 2013): *Studies in English Literature*, English Number 56 (2015), pp. 219-24.

VI. 辞書・事典

37. *The Kodansha Campus English-Japanese Dictionary* (講談社) (a ~ appetizer, diminish ~ draw-string の項の分担執筆) 1998年.
38. 『英語文学事典』(ミネルヴァ書房) (中世文学関連の主要詩人, 作品, 批評の項目について担当執筆) 2007年.

Ⅶ. 批評・解説・紹介ほか

39. 「英語史研究と中世問答詩」The Tabard, 創刊号, 1986年, 7~9頁.
40. 「人称代名詞—3人称複数」『話題源 英語編』(東京法令出版)上巻, 1989年, 74頁.
41. 「特集:20世紀のこの一点:William Paton Ker, *Epic and Romance*, 2<sup>nd</sup> ed. (Macmillan and Co., 1908)『英語青年』千八百号記念(研究社)第144巻/第11号, 1999年, 681頁.
42. 「春宵感懐/ウオルター・ペイター」『堀正人—思い出集』(ナニワ出版)1999年, 58~60頁.
43. 「漱石と猫とトマス・グレイ」『芽萌えんと森』(浪漫書房)第3号, 2001年, 11~18頁.
44. 「特集:英文学の教え方(II)」『英語青年』(研究社)第148巻/第9号, 547頁, 556頁, 2002年, 571~72頁.

Ⅷ. 学会発表

45. 中世英文学研究会第34回例会「*Sir Gawain and the Green Knight*における二人称代名詞YEとTHOUの交替移行について」(1981年).
46. 日本英文学会第56回全国大会「*The Owl and the Nightingale*における反復表現について」(1984年).
47. 日本中世英語英文学会第3回西支部例会シンポジウム:*Sir Gawain and the Green Knight*の登場人物へのアプローチ「文体論的側面からみた登場人物の個性」(1987年).
48. 日本英文学会第60回全国大会シンポジウム:*The Owl and the Nightingale*をめぐって「文体論の立場から」(1988年).
49. 日本英文学会第67回全国大会シンポジウム:中世文学とヒューマニズム「問答詩とロマンスにおけるヒューマニズムの諸相」(1995年).
50. チョーサー研究会第22回例会「Aspects of Repetitive Word Pairsについて」(1995年).
51. 日本英文学会第70回全国大会シンポジウム:中英語テキストと辞書「中英語テキストの多様性/多義性と辞書」(1998年).
52. 日本英文学会第72回全国大会シンポジウム:チョーサーとその時代「『個』の意識——チョーサーと*Gawain-poet*」(2000年).
53. 日本英文学会第79回シンポジウム:中世英語・英文学を問う「中世英語・



英文学研究のゆらぎとひろがり」(2007年).

54. 日本英文学会関東支部例会シンポジウム：学会は研究・教育のために何が  
できるか？—日本英文学会関東支部の将来構想(2011年).
55. 日本英文学会全国大会シンポジウム：中世ロマンスと〈個〉の多様性(2011  
年).

#### IX. 講演

56. 東京都立教員公開講座講演会(2000年).
57. 日野ロータリクラブ(2005年).
58. 日本中世英語英文学会西支部大会(2009年).
59. 第51回大学院英文学専攻課程協議会研究発表会(2017年).